

# 子宮筋腫に対する治療： 子宮動脈塞栓療法

東原 大樹／大須賀 慶悟<sup>1)</sup>／富山 憲幸<sup>2)</sup>／  
澤田 健二郎<sup>3)</sup>／木村 正<sup>4)</sup>

## Summary

症候性子宮筋腫に対する手術の代替治療として子宮動脈塞栓療法(UAE)がある。わが国では2014年にUAEに使用する塞栓物質が保険適用となったが、UAEが臨床現場で普及するに至っていない。また、『産婦人科診療ガイドライン婦人科外来編2017』の改訂により、UAEが手術の代替治療として位置づけられた。今後、UAEが症候性子宮筋腫に対する治療選択肢としての重要性がますます高まっていく可能性がある。今回、わが国におけるUAEの位置づけとUAEの適応・治療内容・注意点やその治療成績について概説したい。

## Key words

症候性子宮筋腫  
子宮動脈塞栓術  
UAE

## はじめに

子宮動脈塞栓療法(uterine arterial embolization:UAE)は、1976年に子宮頸がんの出血コントロール目的に Athanasoulis らにより世界ではじめて報告された<sup>1)</sup>。子宮筋腫の手術時の出血量の低下を目的とした術前塞栓の有用性の報告が、Ravina らにより1994年に報告されたのち<sup>2)</sup>、同著者により症候性子宮筋腫の治療としてUAEの有効性が1995年に報告された<sup>3)</sup>。一方、1999年にはKatsumori らによりわが国において、はじめて子宮筋腫に対するUAEの有効性について報告がなされた<sup>4)</sup>。しかし、当時使用可能であった塞栓物質は保険適用外の外科用止血剤であるゼラチンスポンジを用手的に細片したものであり、UAEはなごらく保険適用外診療の自費診療として行われていた。2014年春より球状塞栓物質である血管塞栓用マイクロスフィア(エンボスフィア<sup>®</sup>、日本化薬社)(図1, 2)が市販され、多血性腫瘍または動静脈奇形における動脈塞栓術時に使用可能となった。この多血性腫瘍のなかに子宮筋腫が含まれており、わが国においてもUAEが保険適用となるに至ったが、子宮筋腫に対するUAEは臨床現場ではいまだ浸透していないのが現状である。今回、われわれは子宮筋腫のUAEに関してその適応や治療内容および効果・合併症について簡潔に概説していく。

Hiroki Higashihara, Keigo Osuga, Noriyuki Tomiyama,  
Kenjiro Sawada, Tadashi Kimura

大阪大学大学院医学系研究科放射線医学教室助教、准教授<sup>1)</sup>、教授<sup>2)</sup>  
大阪大学大学院医学系研究科産婦人科学教室講師<sup>3)</sup>、教授<sup>4)</sup>